

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 宗宮喜代子



学位申請者 申 亜敏（しん あびん）

論文名 中国語結果複合動詞の意味と構造
—日本語の複合動詞・英語の結果構文との対照および類型的視点から—

【審査結果】

本論文は、中国語の結果複合動詞の意味的性質を、日本語の「動詞＋動詞」型の語彙的複合動詞および英語の結果構文との対照において考察したものである。分析の対象として、『漢語動詞-結果補語搭配詞典』に含まれる約 5000 の例から一定の判断基準に従って 1866 例を抽出し、これをパターン別に分類することによって中国語の特徴を明らかにした。

審査委員会は、論文審査と最終試験（公開口述審査）の結果に基づいて、学位申請者に対して、博士（学術）の学位を授与するのが適切であるという結論に至った。

なお、審査委員会は、宗宮喜代子を主査とし、学外から影山太郎氏（言語学、人間文化研究機構・関西学院大学名誉教授）・樋口靖氏（中国語学、本学名誉教授）の二氏、学内の高垣敏博教授・敦賀陽一郎教授の二氏を副査とする 5 名で構成された。

【論文の概要】

本論文は 8 章から成る。まず第 1 章で研究対象となる言語事象を概観した後、第 2 章では筆者が論文の中で援用する語彙概念構造理論の基礎となる概念を解説し、第 3 章と第 4 章で日本語複合動詞に関する先行研究を紹介する。第 5 章と第 6 章は本論文の主眼であり、中国語の結果複合動詞をその意味関係に基づいて 2 類 5 種に整理し、用法の詳細を説明する。第 7 章と第 8 章はまとめになる。

中国語では「（嘆き悲しみ泣き続けて、その結果、）万里の長城を泣き崩した」といった類のことがらを複合動詞で表すことができるなど、非常に柔軟に複合動詞の形成が行われる。本論文は、この類の例をはじめとする中国語の結果複合動詞について広範な分析を行い、その分布を通じて、中国語が、従来から言われている被動者(Patient)指向と「なる」型視点を特徴とすることを実証的に裏付けている。

本論文の特徴は、①分析の方法として語彙概念構造の理論を援用している、②中国語の特徴を日本語および英語との比較を通して理解するという対照的な視点をもっている、③上記の中国語の辞典を全 1 巻、網羅的に調査し考察の対象としている、という点にある。

【各章の内容】

第1章「序論」では問題提起として、結果事象を表す表現において中国語、日本語、英語に見られる類似性と相違に注目する。例えば、John hammered the metal flatで、flatは目的語 the metalの状態を表すなど、英語の結果構文が、いわゆる「直接目的語制約」をもつものに対して、日本語と中国語には主語指向が観察される。例えば日本語の「○○はおいしいものを食べ飽きた」で、「飽きた」は主語の状態を表すが、中国語の結果複合動詞の場合も同様である。

このように中国語と日本語には類似点があるが、その反面では相違も大きく、日本語がいわゆる「他動性調和の原則」に従うのに対して、中国語にはこの原則が見られない。例えば「太郎は蚊を叩き殺した」で「叩く」と「殺す」はともに他動詞であるが、中国語の「太郎 把 蚊子 拍死 了」で「拍」は他動詞、「死」は自動詞である。さらに、「私はこの知らせに驚いた」など日本語では心理述語を自動詞で表すのに対して、中国語では原因を主語とする複合動詞が用いられる。

これらの言語事象に対して統一的な説明を行い、そこから中国語の特質を理解しようというのが本論文の主旨である。

第2章「理論的枠組み」では、筆者が援用する語彙概念構造理論の基本概念を紹介する。具体的には、アスペクトに基づく4つの事象タイプ、語彙概念構造、項構造、意味役割、語彙概念構造から項構造へのリンキング、さらには文つまり統語構造への投射についての解説を行う。

第3章「日本語の語彙的複合動詞の意味関係と中国語」では、日本語の複合動詞に見られる5つの意味関係について論じた数々の先行研究を紹介する。特に、日本語には完結性(telicity)をもたない「歩き回る」「はね回る」など「～し回る」という複合動詞が存在するのに対し中国語にはこれに対応する表現が存在しないことから、中国語の複合動詞では結果性が要求されること、中国語において結果性は複合動詞を成り立たせる重要な要件であることを論じる（ただし、数少ないながらも、「泣き叫ぶ」「恋い慕う」等に対応する、2つの動詞の並列関係を表す複合動詞は存在する）。

上で言及した日本語における5つの意味関係とは、「並列」「様態」「手段・結果」「因果」「補文関係」であるが、筆者は次に、先行研究で設定されていない第6の意味関係として「先行事象・結果事象」のタイプを提案する。これは、複合動詞V1V2のうち、V1がV2に時間的に先行しV2は完結性を有するタイプである。このタイプを設定することは第5章で観察する中国語の結果複合動詞の記述のためにも有用である。

V2の完結性に関する違いの他に、筆者は、日本語と中国語では日本語の方が「様態」のタイプが生産的であり、これに対して中国語では、「様態」タイプはV1が移動を表す場合に限定される傾向があることを指摘する。

第4章「日本語の複合動詞の統語と中国語」では、日本語の「動詞＋動詞」型複合動詞の形態統語論的な制約について論じた先行研究を参照しながら、同様の制約が中国語にも存在するか否かを検証する。

日本語では、①主要部が右側にあるという「右側主要部の原則」、②組み合わせられる動詞の種類として「他動詞＋他動詞」、あるいは「非対格＋非対格」を指定する「他動性調和の原則」、③この②への例外を規定した「主語一致の原則」あるいは「主語の義務的同定の原則」、④非対格性という格素性が複合動詞に必ず受け継がれることを言う「非対格性優先原則」が観察される。

このうち①と④の制約は中国語にも観察される。②と③は中国語には全く見られないが、その理由は形態統語的なものであると考えられる。特に④は、中国語と日本語がともに、使役状態変化スキーマの終点となる結果の部分に注目する「なる型」言語型に属することを示唆している。

第5章「中国語の結果複合動詞の項構造と語彙概念構造」では、第3章と第4章での観察結果をふまえて、中国語の結果複合動詞を『漢語動詞-結果補語搭配詞典』からの資料にあたって分析し分類する。その結果、中国語の結果複合動詞として5種類を提案する。

これらの複合動詞の観察を通して、筆者は中国語の結果複合動詞を、語彙概念構造の観点から1)因果関係、2)補文関係、3)先行事象-結果事象、の3つのタイプに分類する。このうち因果関係は最も生産的で頻度も高いタイプである。あとの2タイプは、どちらも事象の先行・後行関係を表すものであり、筆者はこのタイプの語彙概念構造に RESULT IN という意味述語を導入することを提案する。

第6章「使役起動交替と中国語の結果複合動詞」では、「上がる・上げる」「決める・決まる」などの、いわゆる使役交替の現象に関して3言語を比較する。その結果、中国語では少数の例外を除いてすべての使役交替に複合動詞が関与すること、複合動詞の形成によって自動詞の他動詞化(＝使役化)や、他動詞の自動詞化が可能になることを論じる。

特に他動詞の自動詞化については、V1の活動がV2の結果を意図せず、V2は偶発的な状態を表すものであり、V1の活動が特定化されない、という制約があると論じる。

第7章「結果述語の類型」では、中国語の結果複合動詞の主語が被動者あるいは経験者であることに注目する。第6章で見た他動詞の自動詞化の場合は、本来目的語であるものが主語になることから、主語が被動者あるいは経験者であるのは当然のこととして頷けるが、もともと自動詞である「走累(歩き疲れる)」などにおいても、主語は経験者に限定されている。この事実から筆者は、中国語が使役状態変化の事象のうち、結果に焦点を当てる傾向を有する言語であると結論づける。

第8章「結語」では、これまでの観察と考察をまとめて、英語が「する」型言語としての特徴をもち、中国語と日本語が「なる」型言語の特徴をもつこと、また、中国語の場合は、結果複合動詞が中国語のそのような性質を反映していることを述べる。

【講評】

本論文について各審査委員からさまざまな評価がなされた。高く評価できる点は次のようにまとめられる。

1. 複合動詞は、中国からの留学生が好んで取り上げる研究テーマのひとつであるが、その中でこの論文のように語彙概念構造のモデルを用いて多数の辞書例を丹念に整理した論文は他に見られないと思われ、その点での学術的意義が評価できる。
2. 結果複合動詞に見られる使役交替のメカニズムなどは、伝統的な中国語研究でも認識されてきたが解決できなかった。本論文はその問題を新しい方法で解明した。
3. 中・日・英の3言語を結果表現に関して対照し、その範囲内で、3言語の違いを明らかにすることができた。
4. 中国語の記述が興味深く、中国語のおもしろさが伝わった。
5. 研究対象として、中国語の結果複合動詞の全体を網羅したことは評価できる。
6. 先行研究を幅広く読み込んでおり、研鑽を積んだ努力の跡が見られる。
7. この研究の結果を言語学だけでなく中国語教育、日本語教育にも応用することができると思われる。

一方で、次のような問題点や改善すべき点も指摘された。

1. 特定のモデル、特定の先行研究に依存するところが大きく、オリジナルな提案や理論開発のための提言があまりなされていない。
2. 理論的分析としては不十分であり、例文を分類・分析するタイプの記述的研究である。
3. 例文の中には受容可能かどうか疑わしいものもある。例文を扱う際に、母語話者としての直観を駆使して、もう少し例文の正当性を吟味してもらいたかった。
4. 結果を表す形式は複合動詞以外にも、「得」によって導入される文節や、英語の結果構文に類似した形式など豊富に存在するので、将来はこれらも考慮してもらいたい。
5. 一部の事例分析に関して疑問が残る。ある結論を出す前に、データを入念に検討すべきである。

【総合的評価】

総合的評価としては、本論文は、不十分な点はあるが、中国語研究に資するところ大であると判断できる。今後は、現段階での欠点を補い長所を伸ばすことによって、今後の中国語研究に多大な貢献をすることが期待できる。最終試験においては、理論的研究を行うにあたっての基本的な姿勢について、データ収集の方法について、審査委員と申氏との間で意思の疎通を行うことができた。申氏は本論文の不十分な点を認識しており、将来は本論文執筆の経験と反省の上に立って、より良い成果を上げることが期待できる。

以上、学位申請論文の内容と最終試験の質疑応答などから総合的に判断した結果、審査委員会は、申亜敏氏に博士（学術）の学位を授与するのが適切であるという結論に達した。